



身延別院本堂で怪談話を披露する三木大雲師

願 満

復刊第二十一号

2014年 8月

身延別院発行

〒103-0001

東京都中央区

日本橋小伝馬町3-2

Tel 03-3661-3996

Fax 03-3663-2766

怪談を楽しむ集い

青年会が初めて企画・開催

時は江戸、伝馬町の牢屋敷。無数の命が散るところ。暑い夜、寝苦しい夜。そんなあなたに聞かせましょう。牢獄跡で聞かせましょう。ヒヤツとする怪談話。知ってはいけない怪談話――。

身延別院本堂で七月十三日、「怪談」伝馬町僧侶語り 牢獄跡にて「」が開かれました。都心の中央区にもマンションが建ち、新しい住民が増えてきたことから、多くの人にお寺を参拝してもらおうと身延別院青年会が初めて企画したものです。

怪談の語り部を務めたのは、京都・日蓮宗蓮久寺の住職、三木大雲師です。蓮久寺は江戸時代初期の建立で、島原の遊女・吉野太夫との縁が深い名刹です。また、三木上人のもとには、不可解な超常現象に悩まされている人、さまざま霊を供養成仏させてほしいといった人が絶えないそうです。一方で、三木上人は、二〇一四年八月の「怪談グランプリ」で優勝したほどの名人芸の持ち主です。

三木上人は伝馬町の牢屋敷にちなむ怪談話などを九十分にわたって話してくださいました。三木上人の話は、ただ怖いだけでなく、少し笑いあり、勉強になる要素ありと、たいへん有意義な内容でした。

先着五十人で参加者を募集しましたが、大幅に増え、約百三十人に及びました。会場はたいへん盛り上がりました。来場者の関心の高さに青年会のメンバーも驚いたほどです。青年会では今後もこうした機会を積極的に設けていきます。



鮮やかな朱塗りの多宝塔は重要文化財

御首題を いただく旅

第二十一回 兵庫県尼崎市・長遠寺

多宝塔など文化財の宝庫

全国の日蓮宗寺院を訪ねる「御首題をいただく旅」も今回で二十一回目。都内や関東地方の主だった寺院はほとんど訪ね終わってしまい、年を追うごとに遠方の寺院を訪ねる傾向が強まっています。遠方の寺院を訪ねるには、二泊三日とか三泊四日、あるいは四泊五日といったまとまった休みが必要になります。一年のうちで、そういったまとまった休みが取れるのは、会社勤めを続けている私にとってごく限られます。

一番、寺院めぐりの旅をしやすいのは五月の連休です。夏のお盆休みはお上人が最も忙しくされている時期ですし、年末年始もお寺の檀信徒さんらが頻繁にあいさつに訪れる時期で、ゆっくり参拝することが難しいからです。そんなわけで、私の場合、五月の大型連休を利用して遠方のお寺を訪ねることが多いのです。一昨年は高知県、昨年は宮崎・鹿児島といった具合です。そして今年五月に訪ねたのは兵庫県でした。

そんな中で今回紹介したいのは尼崎市の大堯山長遠寺(だいぎょうざん・じょうおんじ)です。阪神電鉄本線尼崎駅の南西約三〇〇メートルのところに、十一か寺が集まる寺町があります。かつて城下町であった面影を今に伝えており、一見の価値ありと感しました。大きなお寺が集まる寺町ですが、この長遠寺も堂々たる伽藍(がらん)を



誇っています。京都の日蓮宗大本山・本圀寺の末寺。観応元年(一二三〇年)永存院日恩(東京池上大坊本行寺第四世)の創建と伝えられています。

山門を入ってすぐ左手に鮮やかな朱塗りの多宝塔があります。慶長十二年(一六〇七年)の建立で、国の重要文化財に指定されており、その優美な姿は寺町のシンボルと言えるものでした。また元和九年(一六二三年)建立の本堂も国の重要文化財。鳥が翼を広げたような屋根の左右の張りも華麗なものです。ほかにも客殿、庫裏、鐘楼も県の文化財に指定されています。文化財が多くて奈良や京都の観光寺院にきたような気持ちになりましたが、お墓参りに来た人以外に参拝者はおらず、私は本堂の前で、団扇太鼓をたたきながらお題目を唱えました。ご住職から御首題とお寺のパンフレットをいただき、さわやかな気分でお寺を後にしたのでした。

当院副住職が北米開教百周年法要に参列

米国・ロサンゼルスにある日蓮宗米国別院で六月二十九日に内野日総管長猥下(総本山身延山久遠寺法主)ご親教の北米開教百周年慶讃宗門法要が開かれ、身延別院の藤井教祥副住職が参列してまいりました。

一九一四年(大正三年)、第十八代日蓮宗管長旭日苗上人の命を受けた旭寛成上人に始まる日蓮

宗の北米開教が今年で百周年を迎えたことを記念して催されたものです。百年前、北米に渡った多くの日本人信徒の心の支えとなった法華経とお題目信仰は、現在、日系人だけでなく米国人にまで広がっています。

副住職は、全国日蓮宗青年会の一員として参加しました。宗門法要後には米国別院よりリトルト

ーキーまでの約八キロを唱題行脚。リトルトーキーでは街頭布教に参加しました。ロサンゼルスに続いて、ネバダ州のラスベガスへ移動。ネバダ観音寺で祈祷会を厳修しました。また、地元の信者の皆さんに御祈祷を行いました。



全国日蓮宗青年会のメンバーと唱題行脚を終えた副住職
(左から4番目、米国リトルトーキーで)



米国別院からリトルトーキーまでを唱題行脚する副住職ら



ネバダ観音寺で信者さんたちに御祈祷する副住職



日蓮宗米国別院で行われた平和祈願祭



▲
唱題行脚を終えた副住職(前列左、リトルトーキーで)

多くの人でにぎわった怪談の集い

百三十人が参加

一面でお伝えしましたように、七月十三日に身延別院本堂で開かれた「怪談〜伝馬町僧侶語り 牢獄跡にて〜」は多くの人に足を運んでいただきました。

青年会では、十思スクエアの協働ステーション



怪談話を聞く参加者で本堂はいっぱいになりました

ン中央の皆さんの協力でチラシを配布してもらったり、参加費を「中央区在住・在勤者は五百円引きの二千円」にしたりと事前のアピール力を入れました。

ただ、参加者が定員を大幅に上回ったのは想像していた以上のことでした。実際、約百三十人の参加者のほとんどが当院を初めて訪れたという人でした。

講師の三木上人の話は怖いだけではなく笑いもありました (写真左)

協働ステーション中央の田邊健史さん(右)にはイベント告知でお世話になりました。左は三木上人 (写真下左)

怪談の集いの受付も大忙しでした (写真下右)



終了後のアンケートでは「日本橋には毎日来ているのに、こんなところにお寺があるとは気づかなかった」「お寺で話を聞いたことはよかった。新しい発見だった」といった回答も寄せられました。

当院では、これまでお寺に縁がなかった人でも気軽に足を運んでもらえるように取り組んでいきます。



寺の動き

当院で寺子屋修養道場
ありがとうの心を学ぶ

「お寺に泊まろう！ ～寺子屋修養道場～」が八月二、三日、身延別院本堂などを会場に開かれました。当院青年会が開催したもので、檀信徒の子どもさん、お孫さんなど九人が参加しました。



充実した2日間を過ごした寺子屋修養道場

「寺子屋修養道場」は、青年会が子育て支援活動の一環として企画を練り、平成二十二年に初めて開催されました。子どもさん、お孫さんが家族から離れ、お寺で生活することで、人や命に対する感謝の気持ちを養ってもらうことが目的です。

今年は「ありがとうの心」「助け合いの心」を感じる事がテーマでした。一日目の午前十時半から、保護者も参加して開会式が行われました。日程説明、昼食、法話の後、子どもたちは日本橋三越前の棧橋から川下りを体験しました。夕方のお勤めの後、銭湯「十思湯」に行き、みんなで熱い湯船につかりました。お寺に戻り、就寝前にはビンゴ大会も行われ、楽しい一日を締めくくりました。

二日目は午前六時に起床。朝のお勤めとして、お自我偈とお題目を唱えました。朝食前の掃除の時間には、みんなで手分けをして本堂、廊下、境内の清掃にも取り組みました。朝食後、午前九時十五分に当院を出発し、九段下の科学技術館に向かいました。同館を見学した後にお弁当をいただきました。

子どもたちとスタッフは、午後二時半から当院で閉会式に臨みました。子どもたちにとっても青年会のスタッフにとっても、充実した二日間でした。

お会式のお稚児さんを募集

毎年十一月三日に行われる身延別院のお会式

で、三年ぶりにお稚児さんを募集いたします。工事中だった「十思スクエア」が完成し、お稚児さんの支度場所を確保できることになったためです。希望者はお寺へご連絡ください。申込書をお送りします。

また、お会式で本堂の内外に飾り付ける花の製作を十月二十、二十一日に行います。都合のつく日、都合のつく時間帯だけでもかまいません。一時間でも、二時間でも、お手伝いいただける方、どうぞよろしくお願いします。

願い事かなうよう七夕祈願

身延別院で七月七日、七夕祈願を行いました。地域の皆さんにお寺に親しんでもらおうと、平成十八年(二〇〇六年)から始めた行事です。檀信徒の皆さんから申し込まいただいた願い事がかなうように御祈願しました。



本堂前に設けられた笹竹

べったら市、二年ぶりに出店

身延別院青年会は、毎年十月十九、二十日、東京・日本橋本町の宝田恵比寿神社を中心に開かれる「べったら市」に二年ぶりに店を出します。昨年は、べったら市出店準備の中心となってきた藤井教祥副住職が中山法華経寺荒行堂に入行する準備のためお休みしました。

青年会のべったら市出店は平成二十一年(二〇〇九年)からで、青年会メンバーが毎年知恵を絞りながら、揚げたこ焼き、讃岐うどん、豚汁など、提供する食べ物を決めてきました。今年は何の店を出すのか、檀信徒の私たちにוות気になるところです。

当院隣接の十思スクエアが完成

身延別院の北側、十思公園に隣接して工事が進められていた「十思スクエア」がこのほど完成しました。十思スクエアは、昭和初期に建設された十思小学校校舎の面影を残して改修された中央区の複合施設です。当院にとっても、お会式のお稚児さん支度場所などとして活用するなど馴染みの建物です。

一階にはコミュニケーションルームのほか、江戸時代に使われていた小伝馬町牢屋敷の模型を展示した「小伝馬町牢屋敷展示館」などがあります。また、十思スクエア別館の二階には、だれでも利用できる銭湯「十思湯」があります。日本橋地域の風景が描かれた浮世絵を眺めながら



完成した十思スクエア別館

ゆったりとくつろげるようになっていくそうです。十思湯の営業時間は月・土曜日・午後三時～午後十一時だそうです。当院の参拝後、一風呂浴びていくのはいかがでしょうか。

鰻供養放生会

鰻供養放生会が六月六日、本堂で厳修されました。放生会は、日本橋地区の鰻の蒲焼の老舗・名店で作る日本橋蒲焼商組合が施主になり、鰻や淡水魚に対し、日頃の感謝、供養の意味を込めて実施している法要です。組合の皆さんは本堂で法要を行った後、境内にある「鰻塚」の前で焼香をしました。

鰻塚は、組合傘下の十八の店が昭和五十八年四月三日に建立した供養塔です。焼香の後、組合

の皆さんは日本橋川まで移動し、鰻を放流しました。

本堂で施餓鬼大法要

身延別院の盂蘭盆会施餓鬼大法要が、七月十六日午後一時から、本堂で厳かに営まれました。お盆(盂蘭盆会)の送り火の日に行っている恒例の行事です。今年も檀信徒約六十人が本堂に集い、全員で提婆達多品、お自我偈、お題目などを唱え、ご先祖をはじめ、有無両縁の諸精霊を供養しました。

今後の予定

- 九月一日(月) 願満祖師終日お開帳
 十二日(金) 怪談 芝・圓珠寺
 ※詳細はチラシ参照ください
 二十日(土) 午後一時より
 二十六日(金) 彼岸結願法要
 十月一日(水) 願満祖師終日お開帳
 十三日(月) 十三日講 午後一時より
 十九日(日)・二十日(月) べったら市
 二十日(月)・二十一日(火)
 お会式花づくり

◇次回はお会式後に発行いたします。

あねや
こねや



梵語と日本文化

筆者が日頃からいろいろと貴重なご教示を受けている札幌のK上人から、最近一冊の本が送られてきた。沼本克明著『歴史の彼方に隠された濁点の源流を探る』(汲古書院、平成二十五年)という長いタイトルの本である。著者は訓点学を専門とする国語学者で、本の内容は、現在我々が何気なく使っている日本語表記の濁点「。」と半濁点「。」とは、もともと梵語(サンスクリット)の悉曇(しつたん)の音表記に用いられていたものが起源だというもので、本はその起源と成立に至るまでの過程を国語学者らしく資料によって詳細に述べている。一般向けに書かれた本とは違うものの、内容はかなり専門的である。

梵語は古代インドから宗教、哲学などの聖典記述用語として用いられてきたもので、現在ではほとんど死語化しているが、それでも現在もインドの公用語の一つとして残っている。ちょうど、古代ギリシャ語・ラテン語のようなものと考えればよい。インドでは四世紀 Gupta 王朝期にはサンスクリットが公用語とされ、インド文化全体に亘って使用されるようになってきた。このような動き中で、仏典も、とくに大乘仏典がサンスクリット化されるようになっていった。

仏教経典の中には陀羅尼(ダラニ)といわれる、不思議な力をもつ一連の呪文の言葉が説かれている。『妙法蓮華経』では第二十六章に陀羅尼品がある。この陀羅尼は中国で漢訳の際は「不翻」として翻訳せず、サンスクリットの音をそのまま漢字で表記した。その音の表記の学問を悉曇学といい、日

本にこれが紹介された初めが、平安初期、遣唐使船で最澄とともに中国に渡って日本に密教を伝えた空海だとされているが、その後が続かず、実質的な始まりが比叡山天台宗の円仁(七九四-八六四)だと、上記の書中にいう。

この円仁以降、日本では悉曇学にもとづいて、サンスクリット音の濁音をいかに表記するかという工夫が重ねられて、音の清濁の書き分けがなされるようになり、それが漢字音表記に適用されるようになり、やがて和訓表記にも用いられるようになったというのが濁音表記の成立過程だという。さらに、もともとは字の左下や右傍などに置かれてあった記号が右肩に移動したのは、南北朝期の千四百年ころからということである。

半濁点成立の経緯は濁点と異なっていて、そもそも日本語の音韻が室町末期以降に変化したために、それに対応すべく江戸中期になって成立したものであるらしい。それになぜ半濁点というかといえば、もともと濁点が点を二つ(：あるいは)で表現していた、その半分の一点(。)で表記するからだという。

以上のことは、恥ずかしながらこの本を読むまで全く知らなかった。毎日、日本語を読み書きしながら、濁点、半濁点のことなど全然意識に上がらなかったのである。不勉強のそしりを免れない。

仏典が中国で漢訳された際、サンスクリットの単語をすべて意識したのではなく、音で写した音写語もかなり多い。たとえば、菩提もボーデー(悟り)の音写、涅槃もニルヴァーナの音写である。これらの音写語は日本にそのまま入ってきて、今日ではその起源が忘れられたまま、日常語として残っているものがある。たとえば塔婆はストウパー、僧は僧伽の略でサンガの音写である。ちなみに僧伽はもともと四人が最小単位の僧団のことで、三人以下の人数では僧伽とは呼ばれなかった。檀那という言葉は日本でいまでも広く使われているが、もともとサンスクリットのダーナという言葉で、布施という意味である。それで思い出したが、芸者さんなどを呼んだときに支払う代金を花代というらしいが、この「花」というのがサンスクリットのパナ(銅銭)からきたものだという。学生時代にインド哲学の先生から聞いた話だが真偽のほどは知らない。ふだん無縁のように思える梵語サンスクリットが意外に我々の身近にあるという話である。(住職)